慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	できの悪い古活字版 : 慶長元和頃刊『新古今和歌集』の性格をめぐって
Sub Title	A study of a Kokatsuji-ban (the old movable-type printing) of "Shin Kokin Wakashu"
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2013
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.48 (2013.) ,p.97- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山城喜憲元教授退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20130000-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

できの悪い古活字版
――慶長元和頃刊『新古今和歌集』の性格をめぐって――

佐々木孝浩

はじめに

年代が明確な世界最古の印刷物として知られる、「百万塔陀羅尼」の存在に明らかなように、日本には奈良時代の八世紀には中国から印刷技術が伝わっており、以後も寺院における内典を中心とする出版活動が行われ続けた。しかしながら、中国では南宋時代の十二世紀頃には商業出版が確立していたとされるのに対し、日本で商業活動としての出版が本格的に行われるようになったのは、四百年以上も遅れた十七世紀になってからであった。この年代的な大きなずれが、日本と中国の書物のあり方に大きな違いをもたらす要因となったものと考えられる。中国では版本が書物の中心的な存在となったのに対し、日本では写本の時代が長く続いたために、複数種ある装訂の用いられ方に大きな違いが生じたのである。

全ての装訂は中国で生まれて日本に伝わってきたと考えられるが、その用いられ方は日本で独自な展開を遂げたようで、中国では出版に適した装訂が他を駆逐するかたちとなったのに対し、日本では写本制作の目的に応じて、複数の装訂の使い分けが行なわれたらしいのである。

こうした日本独特の書物文化が定着した後に、朝鮮半島で発達していた活字印刷の影響を色濃く受けて、戦国時代の終焉に

よる政治経済の安定した社会状況を背景に、日本は本格的な出版の時代を迎えたのであった。日本の書物史における最大の転換点ともいえるこの時期に、書物が出版の普及によってどのような変容を見せたのかは、非常に興味深い問題である。

出版の商業化がもたらした、それまでの寺院系出版との大きな違いの一つが、外典の書目の増大であることは言うまでもない。川瀬一馬の大著『五山版の研究』（ＡＢＡＪ、一九七〇）に詳しく記されているように、鎌倉・室町期でも少なからぬ外典が刊行されていたが、それらはほぼ漢籍に限られたものであった。古活字版印刷の画期的な特徴の一つが、平仮名文の外典の出版を本格的に始めたことにあったことを、改めて確認しておきたい。

本稿では、写本の伝統の中で大切に伝えられていた古典作品が、出版される際にどの様な変化を見せたのかという問題について、ある特徴的な事例を取り上げて検討し、そこから窺える当時の出版に関する意識を探ってみたい。

一　古活字版における『新古今集』の位置

十六世紀の最末期の文禄（一五九二～）から十七世紀半ばの寛永（～一六四四）に至る約五十年の間に刊行された活字出版物を、その後にも存在した活字出版物と区別して「古活字版」と呼ぶ。この期間に営利を目的とした書肆が誕生し始めたと考えられる[1]ことからしても、この時代を日本の商業出版の揺籃期と称することは問題ないであろう。

古活字版は初期のものほど文字が大きい傾向があり、また書体も美しく、「嵯峨本」「光悦本」等と称される特別な装飾料紙を用いたものは、今日でも美術的な価値も高く評価されている。それが徐々に行字数も増え活字も小さくなっていくのだが、そこに古活字版出版の質的変化があることは明らかである。

日本文学における古活字版刊行の重要な意義の一つは、先述のごとく、平仮名書きの和文の作品が刊行されたことである。このことが江戸時代の文学や学問に与えた影響の大きさは言うまでない。漢字よりも画数の圧倒的に少ない平仮名活字の制作に、物理的に大きな障害があったことは、今日の我々の感覚か

らは判りにくい。当時の平仮名書きは連綿体であり、筆で数文字を続け書にするのものであったので、漢字や片仮名、あるいはアルファベットの活字の様に、一文字一活字で組版をするようにはいかなかったのである。それを可能にしたのは、連続活字・連綿活字などと呼ばれる、続けて書くべき数文字を一つの活字として制作する方法の開発であった。この技法がどの様にして生まれたのかは大きな問題で、いくつかの可能性が考えられるが、[2] ここでは深入りはしない。ともかくこの技法を用いることにより、平仮名書きの多種類の作品の活字出版が可能になったのである。またこの技法は、整版ほどではなくても、[3] ある程度は筆記体の再現が可能であり、特に初期の平仮名の古活字版は写本の複製的性格が濃厚である。

古活字版における日本文学書の刊行に関する傾向について、古活字版研究の基礎を築いた名著である、川瀬一馬『増補 古活字版の研究』（ＡＢＡＪ、一九六七）の「第八章　国文学書の活字開版　第一節　国文学書活字開版の発生と其の意義」に、興味深い指摘がある。

其の国文学古典開板の勃興が、活字印刷術渡来以後、国書開板の先駆として現れた史書類の出版に刺戟せられたものである事は否み難い。従つて最初、国文学古典の刻書は、古典と言ふよりは、寧ろ当時の現代文学にちかい中世期の軍記物語の方面に発生し、次いで同じく中世期の随筆類、延いては王朝文学の作品の開板に及んでゐる。之は、一には当時の武家階級の要望に基くものであらうが、又一には活字印刷術伝来以後、近世の印刷文化が、実用的方面に発展せんとする現象に基くものであつて、特に注意すべき点である。

開版の順序に明らかな傾向が確認できるというのであり、「総じて古典文学に於ける活字開版は、古物語・軍記物語・草子・随筆の類に多く、之に比して歌書の類は当時流行した連歌を加へてもなほ極めて少数である」と纏められてもいる。

本稿で取り上げたいのは、珍しい歌書、しかも古活字版で刊行された唯一の勅撰和歌集である『新古今和歌集』の、二種ある古活字版の内の最初に刊行されたものについてである。この版本は、非常に興味深い特徴を有しており、古活字版の性格、ひいては出版の意味や意義を考える上で、重要な事例になるこ

とが期待できる。

先の川瀬の指摘と、この版本の古活字版における位置を確認するために、やはり川瀬の『増補 古活字板の研究』を利用して、片仮名を含む仮名の文学作品（注釈類は除く）の古活字版の種類を次に整理しておきたい。版種は全体の数を上げ、片仮名活字のものは（　）に入れてその数を示した。

【作り物語・歌物語】 8作品

竹取物語 6種　伊勢物語 11種　大和物語 10種　宇津保物語（俊蔭巻）3種　源氏物語 4種　源氏小鏡 7種　狭衣物語 4種　住吉物語 4種

【歴史物語】 4作品

栄華物語 1種　大鏡 1種　水鏡 1種　増鏡 1種

【軍記物語】 7作品

平家物語 18種（片仮名5）　源平盛衰記（片仮名）3種　保元物語 12種（片仮名2）　平治物語 11種（片仮名2）　太平記 15種　曽我物語 8種　義経記 6種

【説話】 4作品

宇治拾遺物語 1種　宝物集 6種（片仮名1）　撰集抄 7種　沙石集（片仮名）7種

【草子・日記・紀行】 5作品

枕草子 8種　徒然草 19種　方丈記 3種　十六夜日記 1種　吉野参詣 1種

【和歌・連歌】 21作品

八雲御抄 1種　和歌題林抄 1種　万葉集 2種　見咲和歌集 1種　百人一首 3種　左大将家六百番歌合 3種　勅撰名所和歌抄出 1種　類字名所和歌集 5種　**新古今和歌集** 2種　随葉集 2種　分葉集 1種　無言抄 5種　匠材集 4種　藻塩草 3種　至宝抄 5種　発句帖 5種　新撰犬筑波集 7種　新撰菟玖波集 1種　我師集 1種　宗祇日発句 1種　いぬたんか 1種

【能】 3作品

花伝書 5種　謡本 16種　久世舞 2種

これを一見すると、和歌関係の作品が多いようであるが、それは連歌関係の書目が豊富であるためであり、作品の版種の数をみれば、やはり軍記物語や歴史物語を含めた物語類や説話、随筆の類が主流であったことが判るのである。さらに省略した

注釈類を加えれば、その傾向は一層顕著になるであろう。川瀬の指摘通り、古活字版における歌書の需要はあまり高くなかったことが確認出来るのである。

『新古今和歌集』の二種の内、その最初のものは活字の書体や形式などから、川瀬が推定しているように「慶長元和」（一六一〇～一六二五頃）頃の刊行と考えられる。これに先立つ慶長年間から（といっても日本文学作品の刊行は慶長七年（一六〇二）以降であるようだが）、元和末年（一六二五）頃までの刊行と考えられる、仮名作品の古活字版を、やはり『増補 古活字版の研究』を利用してまとめたのが次の一覧である。

【作り物語・歌物語】

竹取物語（第一種本）　伊勢物語（嵯峨本）　源氏物語（伝嵯峨本）　源氏小鏡（嵯峨本）　住吉物語（第一種本）

【歴史物語】ナシ

【軍記物語】

平家物語（十行平仮名本、同下村本、同中院本）　源平盛衰記（一）　保元平治物語（第一～四種（以上平仮名）、同片仮名十一行本）　太平記（慶長七、八、十、十二、十五年刊本）　曽我物語（一）（二）

【説話】

撰集抄（嵯峨本）　沙石集（慶長十年刊要法寺版）

【草子・日記・紀行】

清少納言枕草子（第一種本）　徒然草（雲母摺本、嵯峨本、慶長十八年刊烏丸本、慶長中刊十、十一、十二行本）　方丈記（嵯峨本二種、慶長中刊本）

【和歌・連歌】

万葉集無訓本（慶長後半期）　見咲和歌集　百人一首（嵯峨本）　無言抄（第一、二種本）　連歌至宝抄（第一、二種本）　新撰犬筑波集（第一、二種本）

【能】

観世流謡本（嵯峨本）　久世舞（嵯峨本三十曲、三十六曲本）

確かに、軍記物語や『徒然草』などに人気が集まっていたことは明らかで、その様な時期に、『新古今和歌集』の刊行が企画されたことが判るのである。また同じ歌集ではあるものの、『万葉集』の無訓本は漢字のみで刊行されたものであり、『見咲

和歌集』（内題は「見咲三百首和哥」）は女訓道歌集であり、純粋な歌書とも言いがたく、『百人一首』も歌数の少ない秀歌撰であるので、本格的な和歌集の刊行といえるのは、この『新古今和歌集』が最初であったことも判明するのである。

二　古活字版『新古今和歌集』の版種と伝本

それでは、やはり『増補 古活字版の研究』の記述を基に、所蔵先の目録・解題類の情報等を付加して、『新古今和歌集』古活字版の版種と伝本を整理してみたい。以下では後述する理由により、先に刊行のものを「甲種」、後のものを「丙種」と呼ぶこととしたい。

《甲種》慶長元和中刊（四冊、一一行二〇字、字高約七寸、光悦亜流、仮名序のみ、一九七〇首）

・**高木文庫旧蔵**（原装丹表紙、原題簽、尾藩神邨氏旧蔵）現所在不明

・**大東急記念文庫**（四冊、不忍文庫、阿波国文庫旧蔵、『大東急記念文庫貴重書解題』「改装二五・〇×一九・一糎、字高二一・二糎、「岡田真之蔵書」印）

・**安田文庫旧蔵**（零本、巻三・巻一二～一五）現所在不明

・**大英図書館**（四冊、詳細は後述）

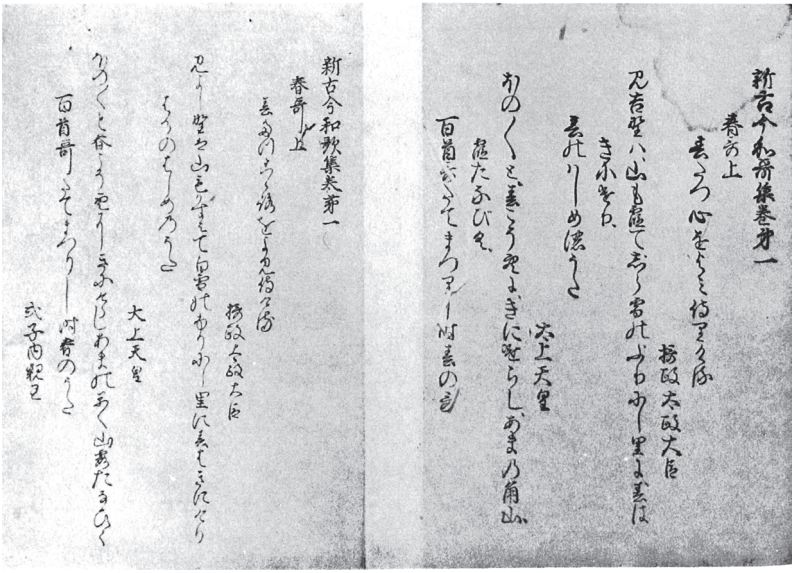
《乙種》元和寛永中刊（四冊、一〇行二五字、字高約七寸五分、両序あり、一九八〇首）

・**安田文庫旧蔵**（二冊、中欠、丹表紙）現所在不明

・**東洋文庫**（合二冊、『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅱ』「改装二七・四×一九・二糎、「雅楽図書」・「雲邨文庫」（和田雲邨）印」・同書に上一オ、上最終丁ウ、下最終丁の図版あり）

・**中島仁之助旧蔵**（巻五半ばから巻十・巻十一～十四の二冊、『弘文荘待賈古書目四二』「藍色市松模様刷り出しの原表紙、二八・八×一九・〇糎、印面二二・八×一四・六糎、「浄楽寺」・「春翠文庫」（中島）印」）現所在不明

・**天理図書館**（四冊、青裳文庫（狩谷棭斎）・西荘文庫（小津桂窓）旧蔵、『天理図書館録稀書目録 和漢書之部三』「改装二八×一九・五糎」）



古活字版『新古今集』の甲種（右）と乙種（左）

・日光天海蔵

・名古屋大学附属図書館（合二冊・「図書館データベース」「二六・六×一八・一糎、「貞活」・「奥谷蔵書」・「懐風弄月書屋清玩」（後藤重郎）印」）

甲種には四本、乙種には六本の伝本を確認できる。この他に個人蔵の一本を展示会で一見したことがあるが、版種は不明である。甲種の大英図書館本と乙種の名古屋大学本は『増補古活字版の研究』未載のものである。猶、参考のために同書に掲載された両種の画像を転載しておきたい。

完備する伝本からみて、両者は共に四冊本として刊行されたことは確かであるが、一覧や画像を見ても明らかな様に、一頁の行数と、一行の文字数が全く異なり、歌数や真名序の有無にも違いがあることからしても、直接的な影響関係は想定できない。

『新古今和歌集』の伝本に関する研究に多くの蓄積があることは言うまでもないが、古写本が数多く伝存することと関連してか、古活字版はこれまであまり研究されてこなかったようで、『新古今和歌集』伝本研究に重要な功績を残した後藤重郎の、版本の総合的な研究である「新古今和歌集板本考」（『新古今和

歌集研究』風間書房、二〇〇四）の中で言及されているのが、和歌研究者からの唯一のやや詳しい紹介であるように思われる。先の甲乙の呼称はこの論文に従ったものである。論文中で特に言及はないが、甲本はその説明内容からして大東急記念文庫本を利用しており、乙本は同氏蔵本（現名古屋大学図書館蔵）に拠って記述されており、特に歌数と本文の特徴が説明されている点で貴重で、先に簡単に確認した形式ばかりでなく、本文にも両者に違いがあることがはっきりする。ただし、版本の総合的な整理であるので、基本的な書誌情報が全て把握できる訳ではないのは致し方ないことである。

三　〔慶長元和〕刊本の書誌と特徴

本稿で取り上げたいのは甲種であり、最初にその書誌を大英図書館蔵本を用いて示し、続いてその特徴について、内題や版式などを対象として説明してみたい。

書誌

大英図書館蔵本（or75.e14）は洋装に改装された合一冊本で、もとは五巻毎の四分冊であったことが、第二・三冊を綴じ誤っていることからも明らかである。大英図書館蔵の洋装改装本に共通する仕様であるが、元表紙の表一枚のみを残し、改装前の様子が判るようなっている。その元表紙は紺地小菊唐草文空押艶出表紙で、大きさは二六・七×一九・二糎ほどで、押八双は確認出来ない。その中央の後補題簽は洗朱色地唐草文蠟箋で、二〇・九×四・八糎と大きく、「新古今和歌集」と墨書されている。内題と一部の巻に存する尾題は、後述するような乱れが認められる。料紙は厚手の印象のある楮紙で、半葉一一行、一行二〇字程度で、歌は二行組み。この歌の組み方も後に詳しく説明したい。全巻丁裏から始まっているのは写本的である。[4]印面は約二一・二×一五・八糎程度。墨付二六六丁。冒頭に仮名序のみを有し、末尾には以下のような底本に存した本奥書がある。

新古今一部二十巻以定家卿自筆これを
うつす文字書様等一事以ほん尤たる
へからすしやう本たるへき者也
尓時應永十九年十一月七日
仁和寺之宮御本申出これをしよしやし
をわむ

巻二十の初丁が欠けており、小紙片にその部分を補写して貼り込んでいる。この他、墨補入や朱の振漢字・補訂・異本注記等があり、また貼紙も多い。猶、同本は、『大英図書館蔵日本古版本集成 第一期和書国文編』（本の友社、一九九六）にマイクロフィッシュがある。

内題付部立名

それではこの古活字版の奇妙さを説明するために、まずは部立名を含めた内題を、綴じ誤りを正した上で以下に示してみたい。猶、「／」は改行を示す記号である。

新古今和歌集序
新古今和歌集巻第一／　春哥上
新古今和歌集巻第二／　春哥下
新古今和歌集巻第三／　夏哥
新古今和歌集巻第四／　秋哥上
新古今和歌集巻第五／　秋哥下
新古今和歌集巻第六　上二／　冬哥
新古今和歌集巻第七／　賀哥
新古今和歌集巻第八／　あひしやうの哥
新古今和歌集巻第九／　りへつの哥
新古今和歌集巻第十／　きりよの哥
新古今和歌集巻第三／　恋うた
新古今和歌集巻第十二／　恋うた
新古今和歌集巻第十三／　ナシ
新古今和歌集巻第十四／　ナシ
新古今和歌集巻第十五／　ナシ
新古今和歌集巻第十六／　雑哥上
新古今和歌集巻第十七／　雑哥中
新古今和歌集巻第十八／　雑哥下
新古今和歌集巻第十九／　神き哥
新古今和歌集巻第二十／　釈教哥

一見して不統一であることは明らかであるが、そもそも仮名序に内題があることからして不自然なのである。『新古今集』は仮名・真名両序を有し、仮名序には内題がなく、真名序に「新古今和歌集序」との内題があるのが普通である。この本には仮名序しかないので、本来は真名序にある内題を仮名序に付した

ように思われる。この古活字版はその最初からかなり風変わりなのである。真名・仮名の順で両序を有する乙種には、真名序にのみ「新古今和歌集序」とある。

次に奇妙であるのは、巻序を示す数字である。「十一」とあるべきところが「三」となっているのである。これでは本来の巻三と重複する形になってしまう。この「三」が意味するところは、この古活字版が四冊仕立てであり、巻十一が三冊目の最初に位置することを理解すれば、自ずと明らかである。『新古今集』の構成を無視して、造本の都合を優先したものとなっているのである。

こうした意識は第二冊目の最初となる巻六にも見えており、こちらは「巻六」とはするものの、その後に三文字程度空けて「上二」とあるのである。室町時代までの綴葉装の『新古今集』の写本は、二帖で仕立てられることが多く、その場合の外題には「新古今和歌集　上（下）」と記されるのが普通である。袋綴の版本はあまり厚くは仕立てないものなので、四分冊としたために、第二冊目に「上二」と表示したと考えられる。[5]であるならば、巻十一も「巻十一　下一」とでもすれば統一を図れるのであるが、そうなってはいないのである。

不統一なのは、巻数のみではなく、部立名についても奇妙な点が多い。巻八「あひしやうの哥」・第九「りへつの哥」・巻十「きりよの哥」と仮名書きになっているのも、通常の写本でも見られない特徴である。これでは却って意味が判りづらいのではないだろうか。さらに奇妙なのは第三冊目で、「恋歌一（～五）」とあるべきところが、本来の巻十一と巻十二にのみ「恋うた」とあるのみで、残りの恋部三巻にはそもそも部立名が存在していないのである。恋部のみの冊であるとは言え不自然さが際立つのである。

この様な内題の不自然さと連動するのが尾題のあり様である。そもそも通常の『新古今集』の写本には尾題は存在しないものである。それが第一冊目の終わりとなる巻五の末尾に「新古今和歌集巻第一終」とあり、同様に第二冊目の巻十末尾に「新古今和歌集巻第二終」とあるのである。これも四冊仕立ての造本を意識したものであることは明らかであるが、巻十五・二十の末尾にはこれがないのである。

このように甲種の内題や尾題などのあり様は、極めて不統一であり、この点のみでも完成度の低い出版物であったと評価を下さざるをえない。恋部の部立名が何故この様になってしまっ

たのかは不明だが、内題と尾題に関しては、四冊本として刊行する意識、書物の物理的な切れ目を明確にしようとする意図が働いた為にこの様な状態になったことは明らかである。ただしその示し方に上と下の部分でずれがあるのである。

版式

内題と尾題から伺える、通常の写本ではありえない奇妙な状況は、活字の組み方でも確認することができる。甲種は半葉則ち一頁を十一行とし、通常の活字だと一行に二十文字が組める設計となっている。室町時代以前の縦長な四半の写本だと、一頁十行が最も一般的なようであるが、十一行のものもないわけではない。問題なのは一行の文字数である。

和歌の基本的な形式である「短歌」は言うまでもなく三十一文字であり、普通に考えると漢字を用いて文字数を少なくしても、一首が一行で収まらないのは明らかである。従ってどうしても二行にならざるをえないのである。ちなみに乙種は一行二十六文字程度であるので、漢字を多用することにより一首を一行に納めることが可能となっている。

写本の場合、散らし書きのようなものは別として、和歌を二行書きするのが普通で、平安時代は改行は成り行きで行われていたのであるが、平安末頃より上句の末尾まで書いて改行するのが定着し始める。鎌倉時代初頭に完成した『新古今集』は、上句と下句で整然と分けられた二行書きが普通であるのである。

それではこの甲種ではどうなっているのか、総巻頭部分の三首の組方を、位置関係はそのままに翻刻してみよう。

新古今和哥集巻第一
春哥上
春たつ心をよみ侍りける
摂政太政大臣
み吉野は山も霞てしら雪のふりにし里に春は
きにけり
春のはしめのうた
太上天皇
ほの〳〵と春こそ空にきにけらしあまの角山
霞たなひく
百首哥たてまつりし時春の哥　』
式子内親王
山深み春ともしらぬ松の戸にたえ〳〵かゝる

雪の玉水

一見しただけで珍妙さがわかるが、簡単に説明してみると、一行目を組んでいって二十字に達すると、残りを次行に三字下げで組む形になっている。これは意識的には一行書きに近いと言えるかもしれない。一首一行書きを意図的に始めたのは藤原定家であると言われているが、その定家も時雨亭文庫蔵の真筆『古今集』などに見えるように、一行で収まらない場合は、行末左側に文字をやや小さくして書き添える形で処理をするのが普通である。活字なのでそれと同じ様にはできなかったとも考えられるが、何集であれ勅撰集の写本でこのような例は見当たらないのである。

歌の二行目の下部が空いているのであるから、上句と下句に分ければ良いようにも思われるが、それだと下部に余白が目立つと考えたからなのか、そのようにはしていないのである。またこの方法にはそれなりの利点があることも、続けて見ていくと明らかになる。

様々な面で特徴的な巻五中の三首（四九三～五）を同様に示してみよう。

河きりといふ事を　　左衛門督通光
明ほのや川瀬のなみのたかせ舟くたすか人の
　袖の秋きり　　堀川院御時百首哥奉
　けるときぎりをよめる　　権大納言公実
ふ本（ママ）をは宇治の川きり立こめて雲井に見ゆる
　朝日山かな　　題不知　そねよし忠
山里にきりのわ（ママ）かきのへたてすはをち方人の
　袖をみてまし　　清原深やうふ

先ほどと違って、余白が少ないのが一目瞭然である。何故そうなるのか理由は明らかで、二行目を歌末の何文字かで終わらせないで、数文字空けてから次の歌の詞書を組んでいるからである。詞書の文字数が少ない時には、作者名まで続けているのである。こうすれば丁数を省略できるのは確かだが、非常に落ち着きのない感じになってしまっているのではないだろうか。

後藤重郎「新古今和歌集板本考」ではこの形式について、「歌は見た目の美しさに主眼をおき、一首一行或は二行書といった特定の形式にこだわる事なく、自由に活字が組まれている」と

評しているが、稿者にはとても見た目が美しいとは思えない。刊行当時の人々にとっても、見慣れた写本とあまりにも異なるので、かなり違和感があったのではないだろうか。

こうした他に類を見ない書式が、丁数を減らすための涙ぐましい努力（乙種より十丁ばかり少ない）によって編み出されたものであるとしても、そもそも何故一行二十字となる植字台と活字を用いたのかという疑問は残る。憶測を逞しくするならば、既に別な作品で用いたものを流用して、制作経費を抑えようとしたとも考えたくなるのであるが、印刷面を見る限り、活字がそれほど使い込まれているとも思えないので、単なる憶説のままになってしまいそうだが、そう考えなければ説明が付けがたいほどに特殊な組み方だということなのである。

四　仮名交じりの本奥書をめぐって

内題の不統一ぶりといい、極めて変則的な版式といい、甲種がかなり妙な古活字版であることが明らかになった。それではそうなった理由はどこにあるのであろうか。それを推定する手掛かりとして、親本である写本に存在した本奥書に注目してみたい。改めて左に掲げておく。

新古今一部二十巻以定家卿自筆これを
うつす文字書様等一事以ほん尤たる
へからすしやう本たるへき者也
尓時應永十九年十一月七日
仁和寺之宮御本申出これをしよしやし
をわむ

この奥書も見るからに違和感のあるものである。奥書は漢文体が基本であるが、妙な漢字仮名交じりになっているのである。しかも短いものであるにも拘わらず文章に破綻があり、すっきりと読み通すことができないのである。

それでも大凡の意味は取ることができ、特に最後の二行は重要な情報であると言える。その検討は後に行うこととして、何故この様な不自然な奥書になっているのかを考えてみたい。それを解明する手掛りになると考えられるのが、先に確認した部立名の状態である。巻第八～十の部立名は、「あひしやう」・「りへつ」・「きりよ」と仮名書きになっている。写本でも漢字で記

すのが普通で、和歌の知識がなければ、「哀傷」・「離別」・「羈旅」だとわかりにくいのではないだろうか。

このことに注目して、本文部分を見てみると、作者名などを始めとして、無理に仮名表記にしているのではないか、と思われるような箇所が目に付く。先に引用した巻五部分で指摘するならば、「そねよし忠」や「清原深やうふ」などである。これらも「曽祢好忠」・「清原深養父」とある方が理解しやすいであろうし、「深やうふ」は「深養父」の訓み方を知らなかったのかとも思われるのである。平安期の写本であれば、作者名を始めとして仮名書のものも珍しくはない[7]が、鎌倉時代成立の『新古今集』の写本にはちょっと見当たらないのではないだろうか。そうであるとすると、こうした仮名表記は古活字版作成時に意図的になされたと考えられることになろう。

その様な傾向からすると、この奥書も本来は一般的な漢文表記であったものを、読みやすくする為に訓み下そうとしたものの、それを行った人物の学識が低かったために、中途半端なものになってしまったと考えられるのではないだろうか。そう思って見直すと、「文字書様等一事以ほん尤たるへからすしやう本たるへき者也」という、意味不明な文章についても、ある程度の復元が可能であると考えられる。

この奥書と構造や表現に共通性のある奥書を他に探すと、妙法院門跡所蔵『古文愚草』の「以一条前大納言實久卿秘本、文字等必件本不違一字写畢、最可為証本者也」（東京大学史料編纂所ホームページに拠る）や、京都大学附属図書館『源氏系図』（谷村文庫・4‐30／ケ／1貴）の末尾貼紙の「右之本牡丹花居士以御筆本、一字不違写之、尤可為証本者也 天文十二癸卯年八月三日 宗枕」[8]等の例を見いだすことができる。問題の部分は奥書の慣用表現と言える、「一字不違」[9]・「尤可為証本」の、写し崩れか訓み下し崩れであろうと推測できるのである。

そこでその原態の復元を試みると、おおよそ次のようになるのではないだろうか（理解の為に読点を付してある）。

新古今一部二十巻、以定家卿自筆、文字書様等一字不違書写之、尤可為証本者也
尓時應永十九年十一月七日、仁和寺之宮御本申出書写之畢

この形で改めて解釈してみると、この古活字版の親本は、応永十九年（一四一二）に仁和寺宮から定家真筆の『新古今集』

を借り出して、文字の書様などを忠実に書写したので、信頼に足る本であったということになる。ちなみに応永十九年時の仁和寺宮は、第十六代門跡であった後光厳院第五皇子の永助法親王（一三六二～一四三七）である。

仁和寺はもとより何処にも定家真筆『新古今集』が現存するとの報告はないし、これと同じ奥書を有する写本も知られていない。だがこの内容が全く信頼できないものでないらしいことは、仁和寺に定家真筆本が伝えられていたことを伝える資料が確認されている[10]ことからも明らかである。応永十九年時まではそれが同寺に存在していたことを伝える資料としても、この奥書は貴重であるのである。仁和寺は応仁二年（一四六八）九月四日に応仁の乱の兵火で伽藍を焼失しているので、あるいはその際にその本は焼亡してしまったのであろうか。

ともかくも、この古活字版が極めて珍しい奥書を有する本に拠っていることがわかった。古活字版で用いられた底本について川瀬は、「古典文学作品が活字印刷術に拠つて開板せらるるに当つては、偶然の機会が、其の底本を決定する事が多かつたであらうと考へられる事である。けれども大体に於いて開板者の入手し易き伝本は、其の当時最も流布してゐた通行本であつたに相違なく、且又、読者の欲求するものも亦流布の通行本であつた事は容易に承認し得る所である」と述べている。底本には、開板者の入手しやすかった、当時流布していた通行本が用いられることが多かったというのであるが、この甲種の場合はそうとは言えない例に数えられるのであろうか。

その点では、甲種は出版を通じて、貴重な本文情報を後世に伝えたと評価できそうであるのだが、これまで確認してきた世にも稀なる書式からしても、親本の本文を忠実に受け継いではいないらしいことは明らかであろう。この点についても後藤が、「用紙は雲母引紙にて、前記のごとく美術的見地からの配慮が全般にゆきわたり、詞書の省略が極めて多く、専ら歌を中心としての配慮がなされている事が知られる。従って奥書通りであれば、定家が書写した仁和寺宮御本（切出歌一首もなく、建保四年源家長書写本系かと考えられる。）系の本文を伝えるものとして、まことに貴重な内容を伝える筈のものであるが、現実には、歌の欠脱・歌順の異同・詞書の省略等、本来の姿からはかなり遠ざかったものとなっていることは惜しまれる」と指摘している通りである。甲種の本文は定家筆本をそのままに伝えたものではなく、相当傷を被ったものであることは確かなので

ある。書誌の説明で指摘した書き入れの殆どは、補訂を目的とするものであり、それが多いという事実がそのことを良く示していよう。どの段階での傷なのかは問題であるが、組版時のものが少なくないことは、奥書の状態を見ても明らかではないだろうか。

五　刊行の意義と意味

以上確認してきた様に、この『新古今集』古活字版の甲種は、版式でも表記でも本文においても、非常に癖のある特殊な性格を有する存在なのである。一般に古活字版の本文は優れているという定評がある[11]。そのような古活字版の中にあって、この甲種本はいささかできが悪いと評さざるをえないのである。

この本が『新古今和歌集』の研究上に有する意義は、奥書とそれに関連する情報を伝える点と、同集版本の嚆矢に位置するという程度なのであるが、古活字版を含めた日本における出版史上においては、なかなかに重要な存在であると考えられそうなのである。その点について確認してみたい。

これまで指摘してきた甲種本の特徴は、短所としか評しようのないものばかりであったが、そのようになってしまった原因を考えると、そこには一つの共通性が認められるようである。

先ず内題が不統一であることは、四冊本の版本であることに対する意識の関与が推測できた。平仮名古活字版は初期の物であればあるほど、写本の複製を制作する意図が濃厚に窺えるが、そうした製作意識が薄らぎ始めたことを示すものであるかもしれない。

続いて極めて特殊な版式についてであるが、通例を無視してまで、二行目の余白に次歌の詞書や作者名を組み込んだのは、頁数や冊数の抑制を図り、製作費の削減を目論んだためと考えられるであろう。

次に本奥書を含めた仮名表記の多さについては、初学者にも読みやすい本文の提供を意図したと考えられよう。担当者の学識が不足気味であったのは残念であるが、その意欲が感じられるのである。

以上の確認から見えてくるのは、版本という存在の意味と役割を、悪戦苦闘しながら模索している製作者の姿ではないだろうか。四分冊であることを明確に示して利用しやすくし、丁数を抑制して製作費と販売価格を抑え、和歌に詳しくない者でも

読みやすい本文を提供する。売れることが期待できる商品を企画しようとした意図が感じられるのである。

古活字版の購買者層はそれなりに裕福な人物であった筈で、嵯峨本の様に制作費や販売価格を気に掛けないような、豪華な出版物は慶長期には珍しくないかもしれないが、元和・寛永と時代が進むに連れて、活字も小さくなり、装飾性の少ない書風に変化していく傾向がある。僅か半世紀の間でも、出版物が大衆化し、購買層も次第に増大していく様子が明確に把握できるのである。甲種本はそうした変化の兆しとして位置づけることが可能なのではないだろうか。

売れる商品とする為には、作品の選択が重要であることは言うまでもない。甲種に先立って刊行された古典的な歌集（百人一首は秀歌撰として別に考えたい）は、先に見たように『万葉集』のみであった。無訓本であるから、漢字活字のみでの刊行が可能であったことが、その選択に大いなる影響を与えたことは疑いない。結局実質的には『新古今集』が古典歌集刊行の最初であったことになる。『新古今集』が人気のある作品であったことは疑いないが、何故最も需要が高かったであろう『古今集』ではないのか、ということは気になるのである。

『古今和歌集』の最古版と考えられるのは、川瀬は認めていないが、嵯峨本であるとも言われる整版本である。[12] 甲種本との先後関係ははっきりしないが、この伝嵯峨本が先であったのだとすると、重複を嫌ったが故とも考えられよう。

しかしそればかりではなく、当時の歌人達にとって『古今集』は、師についてその音読法や解釈を学ぶべきものであり、その本文も師の本を写したものが与えられたり、許可を得て写し取ったりすることが、中世以来の伝統であったというような状況が、[13] 『古今和歌集』の活字出版の足枷になったことも考えられる。またそうした伝授・相伝的な教育のシステムが、『古今集』に限らず和歌集の活字本が少ない要因になった可能性もあろう。

そのようにやっかいな問題が付随する『古今集』を避けるとすると、勅撰和歌集で次に需要が高く、伝授とあまり関係の深くない『新古今集』が選ばれたのも、至極納得できるように思われるのである。

おわりに

伝嵯峨本『古今和歌集』という有力な対抗馬がいるので断定

はできないが、慶長元和年間に刊行されたと考えられる『新古今和歌集』は、勅撰和歌集初の版本である可能性が高く、少なくとも古活字版としては最初のものとして位置付けられるものであり、日本の印刷史上で注目すべき存在であると言える。権威を有する勅撰和歌集が刊行されたことは、『伊勢物語』や『源氏物語』等の散文作品の刊行よりも、新時代の到来を一層当時の人々に印象づけた出来事ではなかっただろうか。

そのような栄誉ある地位を占めるものでありながら、その実態は、内題の不統一さや、珍妙な本文の組方、意味の通りがたい本奥書に、傷の目立つ本文といった調子で、これでよく売り物にしたな、とまで思われてしまう完成度の低さなのである。嵯峨本『伊勢物語』の様な、当代を代表する公家歌人にして古典学者であった、中院通勝の積極的な関与が認められる事例とは大きく事なり、しかるべき監修者や指導者がいたとは到底思えない出版物なのである。

しかしその欠点の幾つかのものは、写本と版本のあるべき違いを製作者が自問し、写本の複製という地位から一歩進んで、版本であることを明確に示そうと意図したことによって生じたものであるらしいことからすると、意欲だけが空回りした観はなきにしもあらずではあるものの、その製作者の意欲は高く評価すべきであると思われるのである。

長友千代治は商業出版の開始時期について、「わが国で商業出版がはじまり、それが書肆の営業として確立したのは、江戸時代初期と漠然ということはできる。しかし厳密にはそれがいつはじまったのかということや、その具体的な営業状況を明らかにすることはきわめて困難である。現在では出版や読書について、諸般の事情をできるだけ多く探り、総合的に状況判断するしか方法はないように思われる」[14]と述べている。

後陽成・後水尾両院による勅版や、徳川家康の駿河版などの存在がある故に、古活字版の刊行が即ち商業出版の開始と見なせないことはいうまでもない。嵯峨本にしても贈答用の品であったとの考え方も根強いが、特に謡本に見られるような版種の多様さと生産された量からすると、贈答目的の域を超えているとする意見もある。[15]冒頭で触れた、名前の判明する書肆の登場は、商業出版の開始を証明する有力な証拠であるが、それのみで判断するのも穏当ではないであろう。やはり様々な角度からの情報を集めて総合的に判断すべきであるのはいうまでもない。

そのような立場からすると、この『新古今集』古活字版に窺

えた工夫や努力は、贈答品製作のためであったとは考えがたく、やはり商品としての版本というもの産み出そうそとする試行錯誤であったと思われるのである。歌書よりも連歌書の古活字版の方が多いことからすると、連歌愛好者の購入を当て込もうとしたのかもしれない。

踵を接するようにして刊行された乙本は、写本の複製的な性格を濃厚に有しており、こうした商品たる版本のあり様を追求する試みが、直線的に発展していったわけでないことがわかる。ただし、直接的な影響の有無は不明ではあるが、この乙本にも尾題があることは、版本的な性格として注目してよいであろう。揺り戻しとも見える乙本の存在からしても、この甲本は日本の商業出版の揺籃期を象徴する存在であると言えるのではないだろうか。

こうした試行錯誤が、これ以降どの様に受け継がれいったのかという問題について今後も検討を続け、日本の商業出版確立の実相を明らかにする一助としたい。

注

（1）慶長八年（一六〇三）に『太平記』を刊行した冨春堂（明の金陵の書肆冨春堂を意識した名前か）や、同十三年に『五家正宗賛』を刊行した中村長兵衛尉、同十四年『古文真宝』の本屋新七などがその例である。なお、長友千代治「商業出版の開始」『江戸時代の書物と読書』（東京堂出版、二〇〇一、初出は『岩波講座日本文学史七 変革期の文学Ⅱ』（岩波書店、二〇〇〇）を参照いただきたい。

（2）連続活字は、一五九八年刊の『さるばとるむんじ』や、一五九九年刊の『ぎやどぺかどる』等のキリシタン版で既に用いられている。ただし、朝鮮版でも暦や族譜などには数文字を一つの活字にしたものがあったともいい、その影響の存在も考え得るし、ちょっとした発想で産み出すことが可能な技法であるとも考えられなくはない。キリシタン版の連続活字については、白井純氏「キリシタン版の連綿活字について」（『アジア・アフリカ言語文化研究』七六、二〇〇八・九）を参照いただきたい。

（3）古活字版でも、跋文などで筆者の筆跡をそのまま残したい場合には整版も併用されている。慶長年間刊『無言抄』の里村紹巴と空性法親王の跋文などはその例である。

（4）序文的な部分に元禄五年（一六九二）の年記がある、持

明院基時の入木道伝書『異本持明院殿口伝基時卿』（センチュリー文化財団蔵本）には、「一物語は二枚除三枚めより書」・「一集は二枚除き三枚目の端から書」とあることからも、写本においては物語と歌集とで書き出し位置を変えるとの故実があったことがわかる。これは綴葉装を基準としているのであろうが、歌集は「端」つまり丁裏から書き始めるというのである。こうした説は、鎌倉時代の世尊寺行房『右筆条々』に「於公物除二表紙付一枚并一枚一、自第三枚之端可書、…又於物語者置端三枚可書之」（続群書類従本）等とあることと繋がっているものと考えられる。綴葉装の『新古今集』古写本を確認してみると、序は必ずしも裏始まりとはならないが、和歌部分は守られていることが確認できる。ただし袋綴である冷泉家時雨亭文庫蔵文永本の現存三冊では、巻頭は表始まりとなっている。猶、近世期の整版の勅撰集版本は丁表から本文が始まるのが普通である。

（5）ちなみに乙種にも尾題があり、第二冊の末尾に「新古今和歌集巻第上終」と、第四冊には「新古今和歌集巻第下終」とあって、やはり上下の二つに分ける意識が確認できる。

（6）例えば、『天正記』第一種本（慶元中刊、一一行二〇字、字面の高さ約七寸、濁点附活字を混ず）等は、形式や活字の書風が近い。同じ活字という訳ではないが、制作場所が近い可能性もあるかもしれない。

（7）例えば、伝公任筆『古今和歌集』では、「文屋やすひて」・「みつね」・「さきの大まうち君」・「ふかやふ」等という具合の仮名書が多い。

（8）「枕」は「椿」の誤写か。

（9）浅田徹氏「『不違一字』的な書写態度について」『中世和歌史料と論考』（明治書院、一九九二）参照。

（10）「御室御本」等と称される伝本で、複数の『新古今集』奥書にその痕跡が見えている。後藤重郎『新古今和歌集の基礎的研究』（塙書房、一九六八）、『冷泉家時雨亭叢書五 新古今和歌集 文永本』（朝日新聞社、二〇〇〇）解題参照。

（11）例えば、『日本古典文学事典』（岩波書店、一九八四）の金子和正執筆の「古活字版」項にも、「テキストとしても、『伊勢』『源氏』『狭衣』『万葉』など若干の古典を別にすれば、伝存する古写本に決して劣るものではなく、その後に現れた整版本に比べると遙かに優れているのである」とある。

（12）正保四年（一六四七）刊二十一代集の『古今集』が、伝嵯峨本の本文に拠っていることの指摘が、川上新一郎氏「古今和歌集版本考（続）」（『斯道文庫論集』三五、二〇〇・二）にあり、その刊行の下限は確定できる。

（13）横井金男『古今伝授の史的研究』（臨川書店、一九八〇）、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』全六巻（赤尾照文堂、一九七一～一九八七）等を参照いただきたい。

（14）注一所掲の長友千代治論文。

（15）渡辺守邦氏「版面を読む―古活字版の印刷法臆断―」『古活字版伝説 近世初頭の印刷と出版』（青裳堂書店、一九八七）。

《附記》本稿は、二〇一四年七月一二日にケンブリッジ大学エマニュエル・コレッジで開催された、「写本・版本 ケンブリッジ国際集会」において発表した、「古活字版『新古今和歌集』をめぐって」の内容に、補訂を加えて成稿したものである。資料閲覧に際し御高配を賜った大英図書館の方々や、発表時に貴重な御意見を賜った諸氏に篤く御礼申し上げる。また本稿は、二〇一三～四年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「室町～江戸期における写本と版本の関係についての総合的研究（代表石川透）」による成果である。